

## できた！くす玉、赤とんぼ

### 9月の折り紙教室開催

北区会主催の第10回認知症講座（第7回折り紙教室）が9月27日、シルバーカレッジ3・4教室で開かれ、運営委員・一般有志ら20人が参加しました。折り紙教室の講師は前回につづき榊田みどりさん（折り紙悠々代表）、榊田公子さん、まどかさんの3人。

#### 認知症の童話を朗読

初めに「ばあばは だいじょうぶ」（楠木章子作）という童話（写真⑥）を道満区会長が朗読しました。認知症になって15年のばあばを、家族全員でささえるという心温まる内容で、参加者は熱心に耳を傾けていました。



右上

このあと、「赤とんぼと菊」「寿 鶴と亀」の作品にチャレンジ。講師から懇切丁寧な指導があったが、参加者はてこずるばかり。お手上げ状態で折り紙は進まず。「赤とんぼ」を作るのに精一杯で、



「鶴と亀」は次回（10月）に持ち越しとなりました。

折り紙教室と併行して実施していた認知症の講話は、今回で一応終了。好評の折り紙教室だけ引き続き開催します。



次いで折り紙教室。榊田講師の説明を聞いたあと、前回から持ち越しになっていたくす玉を引き続き制作。複雑な手順に手間取ったが、全員何とか完成にこぎつけました。=写真

初めての参加も歓迎します。問い合わせは道満区会長まで（090-8237-1402）。

#### 【認知症は忘れる病気】

認知症は「引き算の世界」。忘れる病気です。人は誕生から脳に知識や経験をためる「足し算の世界」に生きています。認知症は貯めるべき記憶や知識が脳から消え去る「引き算の世界」に入ります。発症患者に接するには「うそ」が有効です。引き算介護の心得を紹介します。

- ①説得は「ざるに水」。正論を言うのは、徒労に終わります。説得より納得してもらおうことです。
- ②生きざまが手がかり。仕事や趣味など、本人の人生を念頭に対応します。
- ③負けるが勝ち。認知症の人が譲らない時、介護者が頭を下げるとうまくいきます。
- ④話は短く。用件は長話でなく単語で短く伝えましょう。
- ⑤北風と太陽。力づくで無理強いは禁物です。
- ⑥嘘も方便。常に正直に事実を伝えることが良いとは限りません。
- ⑦「ありがとう」。お礼を言われて嬉しいのは認知症の人と同じ、介護されるようになってお礼を言われる場面もすくなくなるもの。
- ⑧忘れることを利用。認知症の「忘れる」という特性を生かす。お互いにとって「優しい関係」を作り出す手段です。（まとめ 道満俊徳）

## 「災害に立ち向かう」若者奮闘

### 舞子高校環境防災科

「災害死を少しでも減らすお手伝いをしたいんです」。高校生の口からこんな言葉が聞かれるとは。びっくり、ほとほと感心してしまいました。地震・豪雨・台風で大荒れの気象が続く近頃の日本。全国に先駆けて環境防災科が設立された県立舞子高校を訪ね、ここで学ぶ生徒たちは何を勉強し、何を目標そうとしているのか、聞いてみた。

科長の和田茂先生から説明を受けた後、滝川拓海君と山崎歩美さん（共に3年）に質問したら、返ってきたのが冒頭の一言。私たちのボランティアより性根が座っているなあ、と拍手をおくりたくなった。だから、途中で学校をやめる生徒は殆どいないという。

防災科の授業は7割が通常の学科、3割が専門科目、実習など。被災地へ出かけてのボランティア、消防学校への体験入学、学校・団体との防災交流、災害募金活動、六甲の地層見学、外部専門家の講演、防災マップ作りなど、きわめて多忙。年間150回以上も各種行事があるという。クラブ活動も普通科の生徒と同じようにあり、話を聞いた2人も柔道部だった。



消防学校で放水・消火体験

阪神大震災をきっかけに設立された防災科だけに、震災やボランティアへの関心はきわめて高い。防災科設立3年目に起きた中越地震への支援を皮切りに、東日本大震災では、いち早く2011年4月には第1陣20人が石巻へ駆けつけ、順次普通科の生徒も合流して東松島などへ出かけた。2016年の熊本地震でも益城町、熊本市でガレキ撤去を手伝った。中国・四川大地震など海外の大災害では募金活動を積極的におこなっている。



熊本地震の益城町でガレキ撤去のボランティア活動

#### ボランティア交流記 ⑤

JAICAの研修団も途切れることなく次々と来校。中国・ロシア・イラン・南米などと絆を結ぶことができた。2016年に災

害科学科ができた宮城県の大賀城高校とも年2回、交流を続けている。

「中学の時、将来の進路をある程度決めてしまう防災科を選択するなんて、よく決断できたね」と、直球の質問をぶつくと――。滝川君は「小5の時、東日本大震災の映像を見て大切な人が次々失われるを見るのはつらかった。悲劇を減らすしかないと思った」。山崎さんは「小学校の時からボランティアに参加したかった」と打ち明けてくれた。両親の応援もあったというから、すごいファミリーだなあ、と当方は驚嘆するばかりだった。

こうした背景もあって、校内の雰囲気はきびきびしていて、とても明るかった。「いろんな分野の人と交流ができ、視野も広がって学校生活は楽しい」と2人とも口をそろえてきっぱり。防災科の教育目標は〈市民のリーダーを育てる〉ことだという。近い将来、南海トラフ地震があっても防災科の生徒たちは地域リーダーとして活躍してくれるに違いない、と思わせる学校訪問だった。

舞子高校 垂水区学が丘3-2。1974年設立。生徒数840人（うち防災科120人）。共学制。環境防災科の卒業生の進路は進学が大半。消防・警察関係への就職も多い。

（取材 北区会・南形徹）